

エンパワメントの概念整理と研究動向

— スクールソーシャルワーカーのエンパワメント構築に向けて —

An Analysis of the Concept of Empowerment and Trends of Recent Studies

— In Search for a Model of Empowerment for School Social Workers —

村上 満

MURAKAMI Mitsuru

山本小百合¹

YAMAMOTO Sayuri

本稿では、社会福祉、教育、保健・医療分野の論文に投稿されている各分野のエンパワメントの研究の動向と概念について整理した。特に、社会福祉分野の文献においては、Rodgers の概念分析法を用いて、エンパワメント獲得のプロセスに焦点を当てて、概念分析を行った。

その結果、エンパワメント獲得のプロセスについては、先行要件として【負担感】【社会資源の脆弱化】、属性として【知識の獲得】【環境調整】【ケア・支援体制】【主体的な行動】、帰結として【自己実現】【自己向上】のカテゴリーをそれぞれ抽出することができた。また、福祉、教育、保健・医療の3分野に共通する根源には、被抑圧者の解放運動や社会運動があったことが改めて明らかとなった。

以上のことをふまえ、スクールソーシャルワーカーのエンパワメント概念モデルの素案を作成した。

キーワード： エンパワメント、スクールソーシャルワーカー

はじめに

エンパワメント (empowerment) は、近年我が国の福祉、医療、教育、経営、社会開発などの幅広い分野で取り上げられている。特に、社会福祉の分野でこの概念を最初に導入したのは、ソロモン (Solomon, B.B.) である。1976年の著書『ブラック・エンパワーメント：抑圧地域でのソーシャルワーク』(Black Empowerment: Social Work in Oppressed

1 福井県立大学大学院看護福祉学研究科

Communities) で、アフリカ系アメリカ人のクライアントへの効果的なソーシャルワーク実践がエンパワメントであることを記した¹⁾。その後、エンパワメントという用語が様々な側面で用いられるようになり、今日では「ソーシャルワーク専門職の一つの中心的な価値」として位置付けられるまでに至っている²⁾。

本稿では、2008年から2012年までの社会福祉分野をはじめ、教育、保健・医療分野の各論文に見られるエンパワメント概念を取り上げ、その整理を行うとともに、近年児童生徒を取り巻く複雑かつ多様な問題に対し、その環境から働きかけることを専門としているスクールソーシャルワーカー（以下、「SSWer」とする）に向けたエンパワメント概念モデルを検討していくことを目的とした。

各分野におけるエンパワメント概念

社会福祉分野においてエンパワメント概念が用いられ始めたのは、1950年代から1960年代のアメリカで巻き起こった公民権運動であり、この社会的背景をきっかけとして、ソーシャルワークの支援方法にエンパワメント概念が導入された。ソロモンは、「エンパワメントは、スティグマ化された集団に属することにもとづいてもたらされる否定的な評価が生みだしている無力化された状態を軽減する目的で、ソーシャルワーカーがクライアントやクライアントシステムとともに一連の活動に携わる過程」と定義し、黒人のソーシャルワーク実践方法を模索している³⁾。

その後、エンパワメント概念は、女性や障害者、少数民族、AIDS患者など社会的弱者として差別されている人々へのソーシャルワーク実践方法として発展し、現在までに様々な定義づけが行われている。例えば、ステイプルズ (Staples, L.H.) は、エンパワメントを「①パワーを得る過程、②パワーを発達させ、獲得する過程、③パワーを促進し、効果的にする過程、④パワーを与え、認める過程」と定義している。また、リー (Lee, J.A.B.) は、サイモン (Simon, B.L.) の「エンパワメントは、内相的活動であり、パワーや自己決定を求める人々によってのみ開始され、持続されることのできる過程である。このエンパワメント過程において他人は、支援し促進することしかできない」という定義を引用し、エンパワメント過程が支援者ではなく、利用者主体で行われることを強調している⁴⁾。

教育分野に関しては、フレイレ (Freire, P.) の著作をもとに、ウォーラーステイン (Wallerstein, I.) が、1988年に個人や集団や構造の変化を目的とするエンパワメント教育を提唱したことが、エンパワメント概念の歴史的起源となっている⁵⁾。久木田純によれば、フレイレの教育学は、抑圧の構造を理解し、「意識化」し、実践によって次の段階への変容を可能とし、自らが文化の作り手になって行動する持続的な開放のプロセスであるとしている。また入江直子は、エンパワメントを「より人間的な社会秩序をつくるために行動する可能性を認識し、そのために互いに力を作り出すような方法で他者と関係することができるようになること」とし、教師の「支配力としての力」を「創造的なエネルギー

としての力」に転換することで、教師の知識と経験は、学習者とともにすべての者の力を増大させるために使われると述べており、学習者と教師の相互作用によって力が増していく状況をエンパワメントとしてとらえている⁶⁾。

保健・医療分野では、1996年に野嶋佐由美が、ケア対象者の権利や自己決定を尊重しながらその人が持っている力が発揮されるには、ケアを受ける者とケアを提供する者がパートナーシップを形成し、協働して問題解決に取り組んでいかななくてはならないというパラダイム変換を促す概念としてエンパワメントを紹介しており、その後の2000年以降にエンパワメントが広く取り上げられるようになってきている⁷⁾。

エンパワメントの用語については、グティエレス (Gutierrez,L.) らは、「ソーシャルワーク分野でのエンパワメントの概念は、明瞭さに欠けて普及しているため、研究者によって目的、過程、介入方法と多様に解釈されている⁸⁾」と説明している。また、社会福祉分野のみならず、各分野で多様に扱われている現状があることも、多数の研究者によって報告されているところである。以上のことをふまえ、本稿では以下のとおり調査を行った。

調査方法

2008年から2012年までの「エンパワメント」「empowerment」という用語が文献タイトルに含まれるもの、またはキーワードあるいは要約に含まれるものを以下の方法で検索し、その中から関連する学会発表および投稿論文、学術論文のみを抽出し、収集および整理を行った。検索方法等は以下の通りである。

- 1) 国立情報学研究所 (以下、『CiNii』とする) が運営する学術情報データベースによる検索の実施 (検索日: 2013年12月18日)
- 2) 特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会 (以下、『医中誌』とする) が作成する国内医学論文情報データベースによる検索の実施 (検索日: 2013年12月18日)
- 3) 社会福祉分野の文献については、エンパワメント獲得のプロセスに焦点を当てたものをもとに、Rodgersの概念分析法を用いて、エンパワメントの概念を分析

調査結果

1. 文献収集および選別

重複するものを除いた計 392 件の論文を文献タイトル、学会誌、内容から【社会福祉分野】、【教育分野】、【保健・医療分野】、【その他】に分類した (図 1)。

本稿では、福祉、教育、保健・医療分野の3つの分野に焦点を当て、入手可能であ

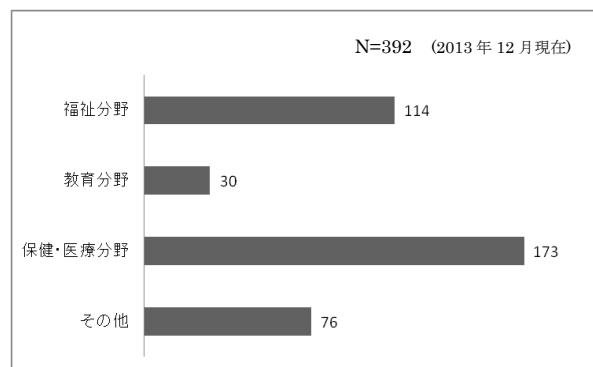


図 1 検索結果にもとづく分野別論文の内訳

った文献計 221 件を対象に、エンパワメントに関する研究動向を調査した。

2. エンパワメント概念の分析方法

概念の使用に焦点を当てた Rodgers の概念分析法を用いた。本手法は、エンパワメントの概念が文献の中でどのような用いられ方をされているか、あるいはどのような定義づけがなされているかを読み取り、その概念を構成する要素を抽出し、さらなる概念の発展の基盤を提供していくものである。具体的には、文献ごとのエンパワメントの定義、概念に先行して生じる要件として【先行要件】、概念を構成する【属性】、概念の結果もたらされる【帰結】に関する記述を抽出し、カテゴリー化を行った。

エンパワメント研究の動向

1. 社会福祉分野のエンパワメント研究の動向

社会福祉分野に関するエンパワメントに関する文献計 68 件について分析を行った。研究対象別に分類すると、①クライアント（高齢、障害者、児童・家庭）を対象とする研究（37 件）が最も多く、次いで②ジェンダーに関する研究（11 件）、③ソーシャルワーク実践に関する研究（8 件）、⑤その他（7 件）、②援助者を対象とする研究（5 件）に大別することができた。さらに、この中からエンパワメント概念を直接取り上げている文献を抽出し、エンパワメントを獲得していくプロセスに焦点を当てた文献計 4 件について取り上げ、分析を行った（表 1）⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。

表 1 エンパワメント獲得のプロセスに焦点を当てたエンパワメントの概念分析

発表者 (発表年)	対象	定義	先行要件	属性	帰結
中井ら (2012)	仕事、子育てを両立する母親	・定義を説明していない	・結婚観、ライフスタイルの多様化 ・仕事と子育てを両立する母親の社会的孤立感	・家族、地域の協力 ・職場の理解とサポート	・自己の存在価値 ・自我の確立
井上 (2012)	女性	・社会的に抑圧された人々がその本来もっている力を発揮していくこと	・民主主義的価値観の内面化	・ジェンダー平等教育を広めること ・社会運動への参加を保障するための環境づくり	・社会運動への主体的参加 ・価値
辻ら (2012)	視覚障害者(思春期中途障害)	・支援者主体のコントロールされた生活ではなく、障害者と支援者の相互関係のなかで、障害者自身が必要な支援を受けながらも様々な体験を通して、力を獲得し、他者との関係のなかで影響を与えながら生活していくこと	・アイデンティティの確立が困難 ・ディスエンパワメント状態	・新しいことへの挑戦 ・新しい環境	・自信 ・ありのままの自分を受け入れる ・更なる飛躍
寺村ら (2008)	妊娠期から出産後までの女性	・当事者(学習者や対象者)の持つ潜在的な能力を開発し、当事者が他者との関係性も含んだ生活をより豊かなものにしていくようになる過程、あるいは、当事者がそのような状態になること	・育児不安 ・核家族のため親の援助を得られにくい状態 ・孤立、依存	・情報の伝達(知識・技術) ・情報の伝達(資源の紹介) ・看護的ケア ・動機づけ ・助言、カウンセリング ・意見交換	・自己実現、自己表現 ・主体的な状態 ・資源の活用

1-1 先行要件

先行要件として、育児不安やアイデンティティの確立が困難などの【負担感】、親の援助を受けにくいなどの【社会資源の脆弱化】の2つのカテゴリーを抽出した。

1-2 属性

属性として、知識や技術、資源など【知識の獲得】、家族や地域の連携などの【環境調整】、カウンセリングなどの【ケア・支援体制】、社会運動など【主体的な行動】の4つのカテゴリーを抽出した。

1-3 帰結

帰結として、自我が確立し、自己実現される【自己実現】、更なる飛躍や資源の活用など【自己向上】の2つのカテゴリーを抽出した。

2. 教育分野のエンパワメント研究の動向

教育分野に関するエンパワメントに関する文献計20件について分析を行った。研究対象別に分類すると、①児童・保護者に関する研究(6件)が最も多く、次いで②授業・学校評価に関する研究(6件)、③教材論・授業論に関する研究(3件)、④人材育成に関する研究(3件)、⑤教師を対象とする研究(1件)⑥その他(1件)に大別することができた。

以下に、エンパワメントの概念を直接取り上げていた研究の動向について紹介する。

2-1 授業・学校評価に関する研究

鎌田ら(2012)は、留学生を対象とした日本語教育プログラムにエンパワメント評価を適用している¹³⁾。また、池田・池田(2009)は、エンパワメント評価の実施ツールのひとつである *Getting To Outcomes* の日本の学校評価への応用可能性について検討している¹⁴⁾。

2-2 教材論・授業論に関する研究

永田(2011・2012)は、エンパワメントの概念を国語科教育に応用し、「エンパワメントとしての読解力」という新たな国語学力の育成に向けた教材論・授業論を提案している¹⁵⁾¹⁶⁾。

2-3 人材育成に関する研究

高橋・金澤(2010)は、途上国のろう者エンパワメントに必要な視点として、教育と手話を説明し、手話を通して高等教育を受けることで、社会的地位の向上を目指すことができるとしている¹⁷⁾。

2-4 教師を対象とする研究

腰丸・森田(2009)は、男女平等の視点から、インド人女性の地位向上のために必要な教育支援として、女性教師のエンパワメントを挙げている¹⁸⁾。

3. 保健・医療分野のエンパワメント研究の動向

保健・医療分野に関するエンパワメントに関する文献計90件について分析を行った。さらに研究対象別に分類すると、①患者・家族を対象とする研究(48件)が最も多く、次いで②看護者を対象とする研究が(24件)、③その他(13件)、④看護教育に関する研究(5

件)に大別することができた。

以下に、エンパワメントの概念を直接取り入れていた研究の動向について紹介する。

3-1 患者・家族を対象とする研究

患者を対象とする文献として、田中(2008)は、リハビリテーションを行う精神疾患患者の事例から、どのような状況でエンパワメントとディスエンパワメントが起こるのかを明らかにし¹⁹⁾、澁田ら(2008)は健康の維持・増進を目的とした高齢者の自主サークルのエンパワメント条件について検討し²⁰⁾、佐藤ら(2009)は、糖尿病患者へPAIDを活用し、エンパワメントアプローチの効果について検証した²¹⁾。また、吉川ら(2009)は、糖尿病患者による看護介入が患者のエンパワメントを高める効果があったのかを明らかにし²²⁾、山根ら(2010)は、精神障害者の地域支援活動を通して、ソーシャルサポートネットワークプロセスを明らかにしている²³⁾。その他、北風ら(2009)は、エンパワメント評価を用いて、暴力に曝された子どもへの心理支援プログラムの効果を明らかにし²⁴⁾、高橋・稲吉(2011)は、肺癌患者のエンパワメントの過程において、「自己の意識化」は欠くことのできない局面であるということを明らかにした²⁵⁾。

家族を対象とする文献としては、西田(2010)は、「養育上の困難を抱える母親のエンパワメント」概念分析を行い²⁶⁾、高橋・樋口(2008)は、家族介護者のエンパワメントを引き出す要因を明らかにした²⁷⁾。

3-2 看護者を対象とする研究

坂下ら(2012)は、終末期がん患者の看取りに関わる看護師のエンパワメントにある「粘り強く関わる力」の構成要因と構造を明らかにしている²⁸⁾。また、村田ら(2008)は、既婚看護師に焦点を当て、仕事と家庭を両立していく過程で行うエンパワメントの内容を4つに分類した²⁹⁾。尾出ら(2008)は、エンパワメントプログラム実施におけるプロセスおよび結果から、参加した中堅看護師の変化を明らかにし³⁰⁾、笠松ら(2008)は、医療観察法病棟における事例検討会での事例提供者のエンパワメント効果の持続に影響を及ぼす要因の明確化を図っている³¹⁾。その他、加藤ら(2008)は、エンパワメントの手法を用いたカンファレンスを実施し、看護師の意欲の変化について考察し³²⁾、田村ら(2010)は、プリセプターのエンパワーを高めるチーム支援を明らかにした³³⁾。

3-3 看護教育に関する研究

清村ら(2008)は、エンパワメントに関する先行文献の分析から、学生がエンパワメントを獲得するための教育モデルを構築した³⁴⁾。また、蒲池ら(2012)は、「健康エンパワメント」を養護教諭養成教育の重要な実習効果であると論じている³⁵⁾。その他、齊藤・狩野(2008)は、被虐待者のコンサートに参加した保健師および助産師学生の視点を分析し、リスクの高い健康課題を有する当事者のエンパワメントについて学習する意義を検討し³⁶⁾、小笠(2009)は、患者と医療・看護職者のエンパワメント形成を支援する教育プログラムの評価について参加前後で検証を行っている³⁷⁾。

以上の各分野における研究動向ならびにエンパワメントの概念整理から考察を行った。

考察

福祉，教育，保健・医療分野の各分野には共通して，根源に被抑圧者の解放運動や社会運動などがあり，各分野における政策に対する批判から改革を求めてきたという歴史的背景があった。研究動向を概観していく中で，エンパワメントの対象となる者は，常にエンパワメントが欠如し，抑圧状態にあるのではなく，自身の資質の向上を目指し，組織の効果を高める取り組みにも活用されていることが，特に医療・保健分野の文献調査から明らかとなった。

エンパワメント獲得のプロセスに焦点を置いた概念分析では，先行要件として【負担感】【社会資源の脆弱化】，属性として【知識の獲得】【環境調整】【ケア・支援体制】【主体的な行動】，帰結として【自己実現】【自己向上】のカテゴリーをそれぞれ抽出した。社会福祉分野でエンパワメント獲得のプロセスについて取り上げている文献は，クライアントを対象にしたもののみであったが，今後クライアントを取り巻く課題が複雑化・多様化する中で，クライアントをエンパワメントしていくためにも，援助者自身のエンパワメントが阻害されない取り組みに焦点を置く必要があると考える。したがって，分野を超えた連携はもちろんのこと，援助者自身が複眼的な視点を持つことが求められる。特に，SSWerは教育と福祉の橋渡し役となる存在であり，学際的な知識をもって児童・生徒を取り巻く環境に介入する存在であるため，SSWerのエンパワメントに焦点を当てて研究していく必要があると考える。またSSWerは，2008年度の全国配置以来，7年目を迎えるが未だ専門性は確立されておらず，業務内容も個々の力量に任されているという現状も否めない。SSWerがエンパワメントを獲得しながら日々の業務を行うことは必要不可欠であり，改めてSSWerのエンパワメント概念を検討していく必要があると考えられる。以上をふまえ，本稿ではこれまでの概念分析をもとに，SSWerのエンパワメント概念モデルを作成した（図

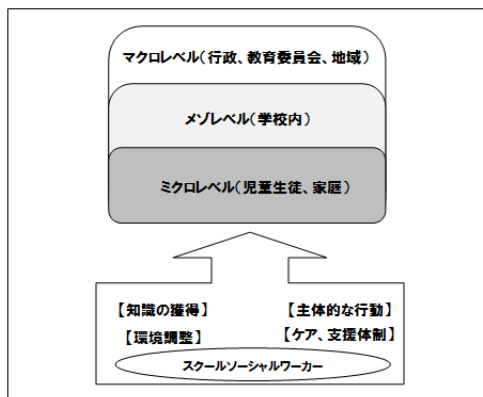


図2 SSWerのエンパワメント概念モデル

1)。すなわち，SSWerがミクロレベル，メゾレベル，マクロレベルからアプローチを行い，【自己実現】を図っていくためには，SSWerとして必要とする学際的な【知識の獲得】が必要であり，福祉に関する機関のみならず，児童や場合によっては障がい者，高齢者を対象とする機関との連携を密にしながら，学校教育現場と家庭と関係機関との間の【環境調整】を行うことが求められ，積極的に現場へアプローチを行うなどの【主体的な行動】を通して，学校教育現場への認知度を高めてSSWerが活動しやすい現場を作ることが大切である。さらには，スーパーバイズ体制など【ケア・支援体制】を充実させることで，現場で孤立しやすいSSWerを支える体制を作ることを通してエンパワメントを獲得することができると考えられる。今後は，これらの概念モデルを基本とするエンパワメント尺度の本格的な開発に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究の一部は、平成 24 年度文部科学研究費基盤研究 C (課題番号 24530746)「スクールソーシャルワーカーの学校教育現場への定着に向けた総合支援カルテの開発 (研究代表者 村上満)」にもとづき行われた。お礼を申し上げる。

引用文献

- 1) 門田光司 (2002)『学校ソーシャルワーク入門』中央法規
- 2) 保正友子 (2002)「学生のエンパワメントを促す社会福祉援助技術の検討」ソーシャルワーク研究 28 (3), 227-231
- 3) 横須賀俊司 (2007)「障害者団体のプログラムにみられるエンパワメント実践の技法」人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌 7 (1), 51-62
- 4) 山口真里 (2005)「ストレングスに着目した支援過程研究の意味」福祉社会研究 4・5, 97-114
- 5) 熊本理抄 (2008)「エンパワメント概念の含意と有効性に関する検証—マイノリティの視点からの「共同体」再生に向けた今日的課題—」社会文化研究 10, 34-57
- 6) 池松玲子 (2009)「エンパワメントをめぐる一考察」武蔵文化論叢 9, 1-7
- 7) 池田和恵・松尾ひとみ (2010)「「エンパワメント」概念の活用状況—文献検討を通して—」静岡県立大学短期大学部研究紀要 24, 1-8
- 8) 保正友子 (2002)「学生のエンパワメントを促す社会福祉援助技術の検討」ソーシャルワーク研究 28 (3), 227-231
- 9) 中井英美子・佐々木秀美・山内京子 (2012)「仕事と育児を両立する母親のエンパワメントに関する研究 (その 1) —仕事と育児を両立させた母親のエンパワメント獲得のプロセス—」看護学統合研究 13 (2), 1-15
- 10) 井上えりこ (2012)「女性のエンパワメントプロセスと社会運動—ある女性地域活動家のライフヒストリーを通して—」生活学論叢 21, 3-16
- 11) 辻京子・大西美智恵 (2012)「思春期に中途視覚障害となった A 氏のエンパワメントの軌跡」日本保健福祉学会誌 18 (2), 29-37
- 12) 寺村ゆかの・伊藤篤 (2008)「妊娠期から出産後までの女性のエンパワメントを目指した実践的研究 - 相談・家庭訪問・地域資源を利用したアウトリーチの試みを通して—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (1), 115-123
- 13) 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹 (2012)「理科系キャンパスの小規模日本語プログラムにおけるエンパワメント評価の実践」研究紀要：富山大学杉谷キャンパス一般教育 40, 45-62
- 14) 池田琴恵・池田満 (2009)「Getting To Outcomes™の日本の学校評価への適用可能性の検討—評価を活用した学校のエンパワメントに向けて—」マクロ・カウンセリング研究会 8, 2-15

- 15) 永田麻詠 (2011) 「エンパワメントとしての読解力に関する考察 - キー・コンピテンシーの概念を手がかりに」国語科教育 70, 60-67
- 16) 永田麻詠 (2012) 「ジェンダーの観点から見た小学校国語科教科書の考察 - エンパワメントとしての読解力育成に向けて -」日本教科教育学会誌 35 (1), 51 - 60
- 17) 高橋恵里子・金澤貴之 (2010) 「アジアの途上国におけるろう者の人材育成とエンパワメントについての一考察 - ジェームズ・ウッドワードと日本財団による事業の経験から -」群馬大学教育学部紀要 (人文・社会科学編) 59, 133-143
- 18) 腰丸知里・森田美佐 (2009) 「インド人女性の地位向上と教育の可能性 - 女性教師のエンパワメント」高知大学教育学部研究報告 70, 19-28
- 19) 田中いずみ (2008) 「精神科リハビリテーション介入におけるエンパワメント効果」富山第医学会誌 19 (1), 35-40
- 20) 湊田英津子・川村牧子・佐藤京子 (2008) 「高齢者の健康の維持・増進を目的とした自主サークルのエンパワメント条件」日本看護学会論文集 (老年看護) 39, 153-155
- 21) 佐藤陽子・山上佳子・伊藤成美 (2009) 「入院を繰り返す糖尿病患者への PAID を活用したエンパワメントアプローチの効果」日本看護学会論文集 2 (成人看護) 40, 39-41
- 22) 吉川星美・三森侑子・水戸美紀 (2009) 「クリスマスカードを用いた糖尿病生活指導による HbA1c の安定化 - エンパワメントを高めた効果 -」日本看護学会論文集 2 (成人看護) 40, 275-277
- 23) 山根俊恵・磯村聡子・楫野由美子・柴田綾子・矢野節子 (2010) 「精神障がい者のソーシャルサポートネットワーク構築プロセス - コミュニティ・エンパワメントのシステム構造 -」日本精神科看護学会誌 53 (3), 144-148
- 24) 北風菜穂子・鈴木ゆみ・榊原佐和子 (2009) 「暴力に曝された子どもへの心理支援プログラムの試みとエンパワメント評価 - 学生ボランティアの活用 -」研究助成論文集, 1-10
- 25) 高橋靖子・稲吉光子 (2011) 「初回化学療法を受ける肺がん患者のエンパワメントの過程」日本がん看護学会誌 25 (1), 37-45
- 26) 西田みゆき (2010) 「養育上の困難を抱える母親の empowerment の概念分析」日本看護科学会誌 30 (2), 44-53
- 27) 高橋フミエ・樋口キエ子 (2008) 「家族介護者の empowerment 支援に関連する要因」帝京平成大学紀要 19, 67-72
- 28) 坂下恵美子・東サトエ・津田紀子 (2012) 「終末期がん患者の看取り経験の中に存在する看護師のエンパワメントの役割」南九州看護研究誌, 10 (1), 9-18
- 29) 村田梢・佐々木美佳・妹尾衣理・正清涼子・三世川史穂・齊藤美和・森木妙子 (2008) 「既婚看護師の仕事と家庭生活の両立における必要なサポートとエンパワメント」看護・保健科学研究誌 8 (1), 1-11
- 30) 尾出真理子・大澤通子・松岡真里 (2008) 「中堅看護師の育成 - エンパワメントプログラム参加による変化 -」日本看護学会論文集 (看護管理) 39, 303-305

- 31) 笠松理恵子・美濃由紀子・大迫充江 (2008) 「医療観察法病棟におけるグループ・スーパービジョン機能に関する研究 - 3 年目の実態報告とエンパワメント効果に影響を及ぼす要因 -」日本看護学会論文集 (精神看護) 39, 164-166
- 32) 加藤綾子・新甫知恵・行俊可愛・沼田志歩・生井裕子 (2008) 「エンパワメントの手法を用いた事例検討カンファレンスの効果に関する一考察 - 看護師の意欲の向上を目指して -」日本看護学会論文集 (看護総合) 39, 200-202
- 33) 田村陽子・松本周子・井上千加・岡伊津子・西内聖子・福井綾・松本鈴子 (2010) 「プリセプターのエンパワーを高めるチーム支援」日本看護学会論文集 (看護管理) 40, 273-275
- 34) 清村紀子・梶原江美・鹿嶋聡子・森さとこ・伊藤直子・小田日出子・植田浩司 (2008) 「エンパワメントを獲得するための教育モデルの構築」西南女学院大学紀要 12, 17-30
- 35) 蒲池千草・筒井康子・上田千尋 (2012) 「養護教諭養成教育における病院実習の効果に関する考察 - 健康エンパワメントについて -」九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要 17, 107-120
- 36) 齋藤茂子・狩野鈴子 (2008) 「被虐待者のエンパワメントからの学び - 保健師学生と助産師学生の視点 -」島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 2, 125-135
- 37) 小笠幸子・竹村節子・大西香代子 (2009) 「患者と医療・看護職者のエンパワメント形成を支援する教育プログラムの評価 - 参加前後での認識変化の過程とその特徴」日本看護学会論文集 (看護管理) 140, 222-224

参考文献

- 1) 谷口政隆 (1999) 「社会福祉実践におけるエンパワメント」社会福祉研究 75, 49-56
- 2) Huff, M. & Jhonson, M. (1998) Empowering Students in a Graduate-level Social Work Course. *Journal of Social Work Education*, Vol. 34, No.3, p. 375.
- 3) Gutierrez, L. GlenMaye, L. and DeLois, K. (1995) The Organizational Context of Empowerment Practice : Implications for Social Work Administration, *Social Work*, 40, p. 29.
- 4) 久木田純 (1998) 「エンパワメントとは何か」久木田純・渡辺文夫編, 『現代のエスプリ』376, 10-34
- 5) 入江直子 (2006) 「“女性の学習” 再考 - “フェミニズム教育学” からの提起」赤尾勝己編, 『現代のエスプリ』466, 57-67
- 6) 鎌田倫子・中河和子・峯正志・後藤寛樹 (2010) 「エンパワメント評価の可能性と限界 - 原理と特徴より -」研究紀要 : 富山大学杉谷キャンパス一般教育 38, 55-70